

# 第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

小学生の部 優秀賞 受賞作品

## 自分の命

埼玉県

湘南ゼミナール 浦和道祖土教室

小学五年 岡田 七海

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

私は、最近生きるということについてよく考える。なぜなら、学校の図書館で借りた「はだしのゲン」を読んで、「命」について考えさせられたからだ。

「はだしのゲン」は、戦争で家族を失っても、一生懸命に生きた少年の話だ。ゲンは、私と同じ位の年齢で、とてもこわい思いや、悲しい思いをしていて、もし私がその時代に生きていたら、ゲンのように乗り越えていける自信はない。今の幸せは、当たり前ではないのだ。

私のひいおじいちゃんも戦争を体験している。もう、亡くなってしまったけれど、小さいころからたくさんかわいがってくれた、とてもやさしいひいおじいちゃんだった。ひいおじいちゃんは、戦争の話をたくさんしてくれた。

第二次世界大戦が始まり、ひいおじいちゃんの元に赤紙がとどいたのは、昭和十六年。当時二十三さいだった。「死ぬ」ということをおそれ、目の前がまっくらになったという。すいみん時間は、ほとんどなかった。それは、敵がいつ攻めてくるか分からないからで、夜は「たこつぼ」という穴の中でぼくだんをせ負いながら過ごした。日がたつにつれ、仲間は次々に死んでいったという。ひいおじいちゃんも、明日は死ぬかくごで戦ったそうだ。

私は、そんなひいおじいちゃんを心からほこりに思っている。ひいおじいちゃんが、がんばって戦争を乗り越えてくれたおかげで、今の私がいるのだから、今の命を大切にしなければならぬ。

今の私には、家族がいて、友達がいて、学校があつて、住む家があつて、おいしいご飯が食べられて、いたい所もなければ、苦しい所もない。朝起きれば、太陽がまぶしくて、外はおだやかな風がふいている。そんな日常が私にとっては当たり前だけれど、戦争の時代を生きたゲンや、ひいおじいちゃんにとっては、とてもかなえられない現実なのだ。そう。当たり前は当たり前ではないのだ。

だから私は、今ある当たり前前ではない幸せに感謝をしていきたい。

天国にいるゲンとひいおじいちゃんに、私は声を大きくして伝えたい。

「自分の命、大切にします。」